

簿記入門Ⅰ

基本テキスト TEXT

体験用テキスト



TAC

テキスト

< 今回の学習内容 >

第1回講義	使用ページ	p. 1 ~ 19
第2回講義	使用ページ	p. 23 ~ 38

簿記入門Ⅰ 基本テキスト コントロールタワー

回数	教材	学 習 内 容	基本テキスト	トレーニング	受講予定日	実際受講日
第1回		簿記の基礎	P. 3 } P. 20	問題1-1 } 問題1-15	月 日	月 日
第2回		営業手続	P. 23 } P. 38	問題2-1 } 問題2-8	月 日	月 日
第3回		決算手続	P. 41 } P. 62	問題3-1 } 問題3-10	月 日	月 日
第4回		簿記一巡の手続 現金・預金	P. 65 } P. 84	問題4-1 } 問題4-8	月 日	月 日
第5回		商品売買	P. 87 } P. 108	問題5-1 } 問題5-8	月 日	月 日
第6回		債権・債務 貸倒引当金	P. 111 } P. 124	問題6-1 } 問題6-10	月 日	月 日
第7回		費用・収益の見越・繰延 精算表	P. 127 } P. 144	問題7-1 } 問題7-8	月 日	月 日
第8回		実力テスト	【出題範囲】～第6回 【目標得点】 点 【実際得点】 点		月 日	月 日

◎ 網掛けの部分に予定と目標を記入し、実際との比較により進捗度と達成度を確認しよう。

TAC方式

簿記入門の学習内容の全体系

テーマ	学 習 内 容	テ キ ス ト			
		簿 記 入 門 Ⅰ		簿 記 入 門 Ⅱ	
1	簿記の基礎	●	第1回		
2	営業手続	●	第2回		
3	決算手続	●	第3回		
4	簿記一巡の手続	●	第4回		第2回
5	費用・収益の見越・繰延	●	第7回		
6	商品売買	●	第5回		第5回
7	現金・預金	●	第4回		第2回
8	債権・債務	●	第6回		第2回
9	貸倒引当金	●	第6回		
10	精算表	●	第7回		
11	手形				第3回
12	有形固定資産				第4回
13	株式会社会計				第1回
14	社債				第5回
15	有価証券				第6回
16	総合問題の解き方				第7回
17	財務諸表				第7回

簿記入門での学習内容は、簿記入門Ⅰでは主に個人企業を前提とし、簿記入門Ⅱでは株式会社を前提として構成されています。簿記入門で学習する論点は、税理士講座の本講座を受講する上での基礎項目となります。

税理士試験は各種の検定試験と異なり難関国家試験です。少しオーバーかも知れませんが、簿記入門でのテキスト内容は100%理解し、トレーニングや実力テストについても最終的には制限時間内にすべて満点を獲得できるように、気持ちを引き締めて学習に挑みましょう。

簿記入門を受講された諸君が、アドバンテージを持って税理士講座の本講座の受講を開始し、目標年度の本試験において合格されることを、簿記論講師一同、心よりお祈りしています。

教材のご利用方法

(1) 基本テキスト

- ▽ 授業および復習時における論点のインプット・ツールとなります。論点説明で論点
- ▽ の概要を理解し、設例を通じて具体的な会計処理や金額の計算方法について正確な知
- ▽ 識を身につけていきます。

(2) トレーニング

- ▽ 授業および復習時における論点のアウトプット・ツールとなります。トレーニング
- ▽ の問題はスムーズに解答できるまで、繰り返し何度も練習しましょう。

(3) ミニテスト (50点満点)

- ▽ 第2回から第7回までの授業で実施する、前回の授業内容についての確認テストと
- ▽ なります。復習の成果をどこまで発揮できるか、チャレンジしてみましょう。

▽	第 2 回	第 3 回	第 4 回	第 5 回	第 6 回	第 7 回
▽	点	点	点	点	点	点
▽						

(4) 実力テスト (100点満点)

第8回の授業で実施する確認テストです。出題内容はテキストで学習した論点で出題形式は総合問題が中心となります。学習進度に合わせて、その時点での実力を総チェックしましょう。

学習にあたっての注意事項

- (1) 税理士試験では、黒色または青色のボールペンまたは万年筆で解答しなければいけません。したがって、なるべく早いうちにこのような解答スタイルに慣れるように練習しておきましょう。なお、修正液や修正テープは使用できませんので、間違えた場合には、次に示すとおり訂正してください。

- ① 金額を間違えた場合…間違えた金額のすべてに二重線を引いて訂正します。

(正) 160,000

(誤) ~~100,000~~

- ② 文字を間違えた場合…間違えた文字のみに二重線を引いて訂正します。

(正) 減

(誤) ~~原価償却~~

- (2) 金額を示すときには、読みやすくするため、必ず3桁ごとにカンマを付すようにしましょう。カンマがないと、不正解となる場合があります。

1,000,000,000
 ↑ ↑ ↑ ↑
 十億 百万 千 円

よく使用される略号等

- (1) B/S……貸借対照表 (Balance Sheetの略)
- (2) P/L……損益計算書 (Profit and Loss Statementの略)
- (3) F/S……財務諸表 (Financial Statementsの略)
- (4) T/B……試算表 (Trial Balanceの略)
- (5) W/S……精算表 (Working Sheetの略)
- (6) a/c……勘定 (accountの略)
- (7) // ……同上の意味。原則的に日付に使用する(勘定科目と金額には使用不可)。
- (8) 借……借方のこと。
- (9) 貸……貸方のこと。
- (10) @……単価 (atの略)
- (11) . ……ピリオドで円位、または1の位を示す。
- (12) , ……カンマで3桁ごとにつける。
- (13) Dr……借方 (Debtorの略)
- (14) Cr……貸方 (Creditorの略)

勘定科目一覧表

この一覧表は、基本テキストおよびトレーニングで使用している標準的な勘定科目を示したものである。したがって、問題に特別の指示のない限り、この一覧表に記載されている勘定科目を使用するように心掛けること。

(注) ※を付した勘定科目は、具体的な名称を付す場合が多い。

★を付した勘定科目は、資産のマイナス勘定である。これらの勘定の記入は本来の資産の勘定と反対になる。

資 産	
勘 定 科 目	内 容
現 金	通貨(紙幣と硬貨)、通貨代用証券
小 口 現 金	用度係が管理する小額の現金
当 座 預 金	銀行への預入金額で無利息の預金
受 取 手 形	手形代金を後日受取る権利
売 掛 金	商品を代金後払い(掛)で販売した場合に生ずる商品代金を後日受取る権利
貸 倒 引 当 金★	将来生ずる債権の貸倒れに対する準備額
有 価 証 券	株式、債券(公社債)など
商 品	販売目的の物品(商品)の原価、分記法で使用

繰越商品	期首または期末における売れ残り商品の原価、三分法で使用
前渡金 (前払金)	商品を仕入れるにあたり代金の一部を仕入先に対して前払いしたときに生ずる債権、商品等の引渡しを請求する権利
前払費用※	費用の前払額
未収収益※	収益の未収額
貸付金	金銭を取引先等に貸付けた場合に生ずる後日返済を受ける権利
未収金	商品以外を代金後払いで売却した場合に生ずる売却代金を後日受取る権利
立替金	従業員等に対して生じた一時的な立替額。従業員への前渡金
建物	営業用の事務所・店舗・倉庫、工場など
(器具)備品	営業用の机・いす・陳列棚・応接セット・各種の事務機器など
車両(運搬具)	営業用のトラック・乗用車・バイクなど
土地	事務所用地・倉庫用地など営業用の土地
減価償却累計額★	営業用固定資産の使用による減価償却費の合計額

負債	
勘定科目	内 容
支払手形	手形代金を後日支払う義務
買掛金	商品を代金後払い(掛)で仕入れた場合に生ずる商品代金を後日支払う義務
借入金	金銭を銀行等から借り入れた場合に生ずる後日返済する義務
当座借越	当座預金残高を超える支払いをした場合に生ずる借入額
未払金	商品以外を代金後払いで購入した場合に生ずる購入代金を後日支払う義務
未払費用※	費用の未払額
未払法人税等	法人税・住民税・事業税の未払額、確定納付額
前受金	商品等の販売のための前受額、後日商品等を引き渡す義務
商品券	券面額相当の商品を後日引き渡す義務
預り金	従業員等からの一時的な預り金、源泉所得税や社会保険料
前受収益※	収益の前受額
社債	社債券を発行して資金調達した場合における後日返済すべき義務

純 資 産 (資 本)	
勘 定 科 目	内 容
資 本 金	個人企業：正味の財産額（純資産額） 株式会社：会社財産を確保するための基準となる一定の額
資 本 準 備 金	払込資本のうち、会社法規定により積立を要する準備金
利 益 準 備 金	留保利益のうち、会社法規定により積立を要する準備金
繰越利益剰余金	もうけの累積額。まだ処分されていないもうけの額

収 益	
勘 定 科 目	内 容
商 品 販 売 益	商品を販売したことによるもうけ、分記法で使用
売 上	商品の販売高（売価）、三分法で使用
受 取 利 息	銀行預金・貸付金等に対する利息の受取額
受 取 配 当 金	保有株式に対する配当金の受取額
有 価 証 券 利 息	保有債券（公社債）に対する利息の受取額
受 取 手 数 料	手数料の受取額
受 取 地 代	地代の受取額
受 取 家 賃	家賃の受取額
有価証券売却(損)益	有価証券を売却したことによるもうけ
有価証券評価(損)益	有価証券の期末時価が上昇したことによるもうけ
雑 収 入	営業外の取引により生じた小額のもうけ
固定資産売却益※	固定資産を売却したことによるもうけ
貸倒引当金戻入	貸倒引当金の期末残高についての戻入額

費 用	
勘 定 科 目	内 容
仕 入	商品の仕入高（原価）、三分法で使用、決算整理後は売上原価
売 上 原 価	販売した商品の原価、三分法で使用
給 料	従業員に対する給料の支払額
広 告 宣 伝 費	新聞広告・チラシ・看板等にかかる費用の支払額
接 待 交 際 費	取引先等との交際および接待にかかる費用の支払額
(旅費)交通費	電車代・バス代・宿泊代などの費用の支払額

水道光熱費	水道代・電気代・ガス代などの支払額
消耗品費	文房具・名刺・コピー用紙・伝票などの購入に係る支払額
発送費	得意先に対する商品の発送にかかる運賃等の支払額
修繕費	建物・備品などを修理するのにかかる費用の支払額
通信費	電話代・切手代・ハガキ代などの支払額
貸倒損失	売掛金等の貸倒れによる損失額
棚卸減耗費	帳簿棚卸高に対して実地棚卸高が少ない場合のその不足額
減価償却費	営業用固定資産の使用による価値の減少額
貸倒引当金繰入	貸倒引当金の当期設定額についての繰入額
(支払)保険料	保険料の支払額
支払地代	地代の支払額
支払家賃	家賃の支払額
雑費	上記以外の小額の支払いで、明細を必要としないもの
支払利息	借入金等に対する利息の支払額
社債利息	発行社債に対する利息の支払額
手形売却損	保有手形を満期日前に換金する際に支払う割引料
支払手数料	手数料の支払額
有価証券売却損(益)	有価証券を売却したことによる損失
有価証券評価損(益)	有価証券の期末時価が下落したことによる損失
雑損失	営業外の取引により生じた小額の費用
固定資産売却損※	固定資産を売却したことによる損失
火災損失	火災により資産を滅失したことによる損失
法人税等	もうけに対して課される税金(法人税、住民税、事業税)の総称

その他の	
勘定科目	内 容
損 益	決算振替における費用・収益の集合場所
仮 払 金	現金預金の減少があったが、その相手勘定または金額が未確定の場合に使用するもの
仮 受 金	現金預金の増加があったが、その相手勘定または金額が未確定の場合に使用するもの
現金過不足	現金実査時に判明した帳簿残高と実際有高との差異

第 1 回

< 今回の学習テーマ >

● テーマ 1 簿記の基礎

テーマ1 簿記の基礎

重要度 ★★★

経済社会で行われている「財務諸表の作成」、「財務諸表の監査」および「税金の計算」といった会計や税務に関する仕事には、簿記という経済活動に関する記録ルールが必要不可欠なものとなっています。したがって、みなさんが会計や税務の仕事を行ううえでも、また、そのための勉強を行ううえでも、簿記をきちんと理解することはとても重要な第一歩となるわけです。テーマ1では、この簿記の基礎となる事項について勉強します。



このテーマの学習内容

テーマ番号	学 習 内 容	学習回数
1-1	簿記の予備知識	入門Ⅰ第1回
1-2	財産	入門Ⅰ第1回
1-3	貸借対照表	入門Ⅰ第1回
1-4	損益	入門Ⅰ第1回
1-5	損益計算書	入門Ⅰ第1回

1-1 簿記の予備知識

1 簿記の語源

簿記という用語は、帳簿記録が略されたものであるとか、英単語のBookkeepingの発音と意味とを巧みに生かして編み出された造語であるといわれています。

2 簿記の意義

簿記とは、企業が行った取引を一定のルールに従って、帳簿に記録することをいいます。なお、ここでいう帳簿には、仕訳帳（しわけちょう）と総勘定元帳（そうかんじょうもとちょう）の2つがあります。



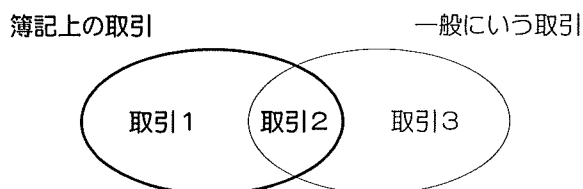
3 取引

簿記では、財産に増減変化をもたらす事項を取引といいます。

〈取引1〉火事で建物が焼失した。

〈取引2〉銀行から現金を借り入れた。

〈取引3〉建物を借りる契約を結んだ。



〈取引1〉建物という財産が減少しているので、簿記上の取引となります。

〈取引2〉現金という財産が増加しているので、簿記上の取引となります。

〈取引3〉契約を結んだだけで、財産に増減変化がありませんので、簿記上の取引ではありません。

つまり、〈取引1〉と〈取引2〉が簿記上の取引となるわけです。

4 簿記の目的

簿記には、次の2つの目的があります。

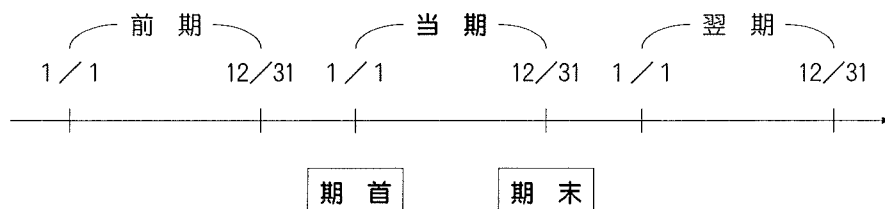
- (1) 一定時点においてどれだけの財産があるか、つまり**財産の状態を明らかにすること**。
- (2) 一定期間の営業活動の結果どれだけもうかったか、つまり**経営成績を明らかにすること**。

5 簿記の前提

- (1) 簿記は1つの独立した企業を単位として行います。簿記入門Ⅰでは、商品売買業を営む個人企業が前提となっています。なお、簿記入門Ⅱでは、株式会社を前提とした学習も行うこととなります。
- (2) 取引はすべて**貨幣の価値**で記録します。
- (3) 会計を行う期間を設定します。

6 会計期間

簿記では、企業の営業活動を一定の期間（通常1年間）に区切って、各期間ごとに記録・計算を行っていきます。この一定期間のことを**会計期間（事業年度）**といいます。そして、会計期間の始めを期首、終わりを期末（決算日）、現に記録・計算を行っている会計期間を当期、当期からみて前の会計期間を前期、次の会計期間を翌期（次期）といいます。



➡トレーニング 問題1-1



歴史 複式簿記の起源

複式簿記は、13世紀初頭にフィレンツェ、ジェノア、ヴェネチアなどのイタリア商業諸都市で萌芽（ほうが）をみたといわれています。そして、14～15世紀には既に形を整え、15世紀の末には完成の域にまで達していたようです。

この複式簿記を解説した活版印刷物の中で、現存する最古のものは、1494年に数学者ルカ・パチオリによって執筆、出版された「算術・幾何・比及び比例のすべて」という書物です。この書物はその名が示すとおり数学書であって簿記書ではないのですが、その「計算及び記録」の章で、当時イタリアの銀行家が用いていた帳簿記録の方法として、複式簿記が紹介されています。

1-2 財産

1 財産

財産とは、資産、負債および純資産（資本）の総称をいいます。

(1) 資産

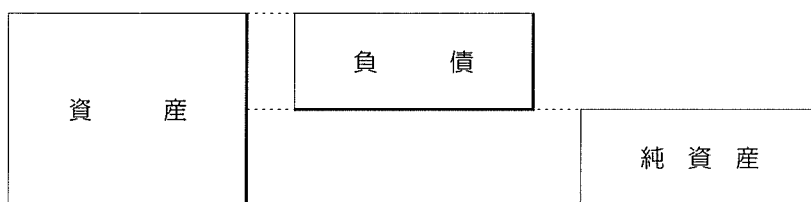
資産とは、企業が所有する物や権利（債権）、つまりプラスの財産のことをいいます。例えば、現金、商品、建物、土地、貸付金などがこれにあたります。

(2) 負債

負債とは、将来返済しなければならない義務（債務）、つまりマイナスの財産のことをいいます。例えば、借入金がこれにあたります。

(3) 純資産（資本）

純資産とは、資産と負債の差額、つまり正味の財産のことをいいます。資産から負債を差し引くと純資産が算定されます。



2 財産の変動

資産および負債は、取引が生ずることにより増減変化がもたらされます。また、同時に、資産から負債を差し引いて算定される純資産が増減する場合があります。

設 例 財産

下記の資産と負債に基づいて、純資産の金額を算定しなさい。

現金 650円 商品 700円 土地 450円 借入金 800円

解 説 (単位：円)

(1) 資産と負債の金額

① 資産：現金650＋商品700＋土地450＝1,800

② 負債：借入金800

(2) 純資産の金額

資産1,800－負債800＝純資産1,000

(3) 資産・負債および純資産の関係

資 産		負 債		純 資 産
現金	650	借入金	800	1,000
商品	700			
土地	450			
	1,800			

➡ トレーニング 問題1－2～問題1－4



設 例 財産の変動

商品売買業を営む個人企業T商店に関する下記の【資料】に基づいて、各時点における純資産の金額を算定しなさい。

【資料1】期首における資産と負債

現金 650円 商品 700円 土地 450円 借入金 800円

【資料2】当期における取引

- (1) 借入金200円を現金で返済した。
 - (2) 商品600円を900円で売り上げ、代金は現金で受け取った。
 - (3) 従業員の給料140円を現金で支払った。
-

解説 (単位: 円)

	資 産	負 債	純 資 産
◇ 期 首	現金 650 商品 700 土地 450 1,800	借入金 800	1,000

(1) 借入金返済	現金 650 $\Delta 200$ 商品 700 土地 450 1,600	借入金 800 $\Delta 200$ 600	1,000
-----------	---	--	------------------

純資産の増減なし

(2) 商品売上	現金 450 +900 商品 700 $\Delta 600$ 土地 450 1,900	借入金 600	1,000 + 300 1,300
----------	---	--------------------	--

純資産が増加

(3) 給料支払	現金 1,350 $\Delta 140$ 商品 100 土地 450 1,760	借入金 600	1,300 $\Delta 140$ 1,160
----------	---	--------------------	--

純資産が減少

🔄 トレーニング 問題 1-5 ~ 問題 1-6

1-3 貸借対照表

1 貸借対照表

貸借対照表（たいしゃくたいしょうひょう）とは、一定時点における財産を一覧表にしたものをいいます。

貸借対照表では、資産を左側に、負債と純資産とを右側に具体的な名称を付して記載します。なお、純資産については資本金と記載します。

2 借方・貸方

簿記では左側のことを借方（かりかた）、右側のことを貸方（かしかた）といいます。貸借対照表においては、借方に記載される項目が資産、貸方に記載される項目が負債と純資産ということになります。

なお、貸借対照表の借方合計額と貸方合計額は必ず一致します。

貸 借 対 照 表	
× × 年 × 月 × 日	
（ 借 方 ）	資 産 × × ×
	負 債 × × ×
	純 資 産 × × ×
	合 計 × × ×
	合 計 × × ×
	（ 貸 方 ）

3 当期純利益

一定期間における営業活動により純資産が増加した場合、それは利益（もうけ）があったということになります。そこで、期末の貸借対照表ではこの内容を明示するために、純資産が増加した部分を当期純利益と記載します。なお、当期純利益を記載する関係で資本金には期首の資本金の金額を記載します。

参 考 略号

貸借対照表は、英語でバランス・シート（Balance Sheet）と呼ばれていますので、これを略してB/Sと表記することがあります。

設 例

商品売買業を営む個人企業T商店の期首（×2年1月1日）と期末（×2年12月31日）における財産に基づいて、各時点における貸借対照表を作成しなさい。

【資料1】期首における財産

現金 650円 商品700円 土地450円 借入金800円 資本金1,000円

【資料2】期末における財産

現金1,210円 商品100円 土地450円 借入金600円 資本金1,160円

解 説（単位：円）

1 期首の貸借対照表

貸 借 対 照 表

×2年1月1日

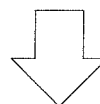
現金	650	借入金	800
商品	700	資本金	1,000
土地	450		
合 計	1,800	合 計	1,800

2 期末の貸借対照表

貸 借 対 照 表

×2年12月31日

現金	1,210	借入金	600
商品	100	資本金	1,160
土地	450		
合 計	1,760	合 計	1,760



この方がもうけた金額
がわかりやすいでしょ

貸 借 対 照 表

×2年12月31日

現金	1,210	借入金	600
商品	100	資本金	1,000
土地	450		
		当期純利益	160
合 計	1,760	合 計	1,760

トレーニング 問題1-7～問題1-8

1 - 4 損益

1 損益

前設例における期末の貸借対照表からは、当期に純資産が160円増加したことが読み取れます。しかし、これが当期のどのような原因によって生じたものなのかということまでは読み取ることができません。そこで、この原因を示すために、損益という概念が必要となります。

損益とは、純資産の変動原因のことで、次に示す収益と費用の総称をいいます。

(1) 収益

収益とは、純資産を増加させる原因のことをいいます。いいかえれば、当期において企業がもうかった原因が収益です。例えば、商品販売益、受取家賃、受取利息、受取手数料、固定資産（建物・土地など）売却益などがこれにあたります。

(2) 費用

費用とは、純資産を減少させる原因のことをいいます。いいかえれば、当期において企業が損をした原因が費用です。例えば、給料、支払利息、支払家賃などがこれにあたります。

2 当期純利益の算定

当期の収益の総額（当期においてもうかった総額）から費用の総額（当期において損した総額）を差し引くと、当期純利益（純資産の当期純増加額）が算定されます。



歴史 借方・貸方の意味

借方と貸方という用語は、12～13世紀頃のフィレンツェの振替銀行に由来します。銀行では、貸出先（融資先）と借入先（預金先）を勘定によって管理していましたが、その時に借方と貸方という用語を使用したのです。

ただし、欧米では日本とは違い、あくまでも先方を主語として表現する慣習があるため、貸出先のことを（銀行からお金を借りている人という意味で）借方、借入先のことを（銀行にお金を貸している、すなわち預金している人という意味で）貸方と表現しました。

なお、勘定の左側を借方、右側を貸方としたのは、欧米では左から右に横書をする文化だからとか、債務よりは債権を第一義的に考える傾向にあるからなどと言われています。

<メ モ>

設 例

商品売買業を営む個人企業T商店に関する下記の【資料】に基づいて、どのような収益と費用があるかを示しなさい。また、それらの金額に基づいて当期純利益を算定しなさい。

【資料1】期首における資産と負債

現金 650円 商品 700円 土地 450円 借入金 800円

【資料2】当期における取引

- (1) 借入金200円を現金で返済した。
- (2) 商品600円を900円で売り上げ、代金は現金で受け取った。
- (3) 従業員の給料140円を現金で支払った。

解 説 (単位：円)

1 収益と費用

	資 産	負 債	純 資 産
◇ 期 首	現金 650 商品 700 土地 450 1,800	借入金 800	1,000

(1) 借入金返済	現金 650 △200 商品 700 土地 450 1,600	借入金 800 △200 600	1,000
-----------	--	---	--------------------

純資産に変動はありません。つまり、収益も費用も発生していません。

(2) 商品売上

現金	450		借入金	600	
	+900				
商品	700				
	△600				1,000
土地	450				+ 300
	<u>1,900</u>				<u>1,300</u>

純資産が300増加しています。これは、商品の売上によって300もうかったことを意味します。つまり、この取引によって商品販売益という収益が300発生したことになります。

(3) 給料支払

現金	1,350		借入金	600	
	△140				
商品	100				1,300
土地	450				△ 140
	<u>1,760</u>				<u>1,160</u>

純資産が140減少しています。これは給料の支払いによって140損したことを意味します。つまり、この取引によって給料という費用が140発生したことになります。

2 当期純利益の算定

商品販売益300－給料140＝当期純利益160

➡トレーニング 問題1-9～問題1-11

1-5 損益計算書

1 損益計算書

損益計算書（そんえきけいさんしょ）とは、一定期間における損益を一覧表にしたものをいいます。

損益計算書では、費用を借方に、収益を貸方に具体的な名称を付して記載します。そして、両者の差額を借方に当期純利益と記載します。なお、収益を貸方に記載するのは、純資産の増加原因として資本金と同じ方向にするためであり、費用を借方に記載するのは、純資産の減少原因として資本金と反対の方向にするためです。

なお、損益計算書の借方合計額と貸方合計額は必ず一致します。

損 益 計 算 書			
×年×月×日～×年×月×日			
（借	費 用×××		収 益×××
	当期純利益×××		
	合 計×××	合 計×××	
方			方

2 損益計算書の役割

損益計算書の役割は、貸借対照表における当期純利益がどのような原因によって発生したのかを明らかにすることにあります。つまり、損益計算書は、当期純利益の内訳明細を示す一覧表なのです。



参 考 略号

損益計算書は、英語でプロフィット・アンド・ロス・ステートメント（Profit and Loss Statement）と呼ばれていますので、これを略してP/Lと表記することがあります。



歴 史 複式簿記に関する名言集

「人類が生んだ最も素晴らしい発明の一つ」 …………… 文豪ゲーテ

「比例理論のように絶対完全なもの」 …………… 数学者ケイリー

「近代資本主義の発展にとって不可欠な用具」 …………… 経済学者ゾンバルト

**設 例** 損益計算書

商品売買業を営む個人企業T商店の当期（×2年1月1日～×2年12月31日）に関する下記の収益と費用に基づいて、損益計算書を作成しなさい。

商品販売益 300円 給 料 140円

**解 説**（単位：円）損 益 計 算 書

×2年1月1日～×2年12月31日

給 料 140	商品販売益 300
当期純利益 160	
合 計 300	合 計 300



設 例 損益計算書の役割

商品売買業を営む個人企業T商店に関する下記の【資料】に基づいて、当期（×2年1月1日～×2年12月31日）の期末における貸借対照表と損益計算書を作成しなさい。

【資料1】期首における財産

現 金 650円 商 品700円 土 地450円 借入金800円 資本金1,000円

【資料2】当期における取引

- (1) 借入金200円を現金で返済した。
- (2) 商品600円を900円で売り上げ、代金は現金で受け取った。
- (3) 従業員の給料140円を現金で支払った。

【資料3】期末における財産

現 金1,210円 商 品100円 土 地450円 借入金600円 資本金1,160円



解 説 (単位：円)

貸 借 対 照 表

×2年12月31日

現 金	1,210	借 入 金	600
商 品	100	資 本 金	1,000
土 地	450	当期純利益	160
合 計	1,760	合 計	1,760

損 益 計 算 書

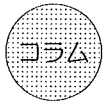
×2年1月1日～×2年12月31日

給 料	140	商品販売益	300
当期純利益	160		
合 計	300	合 計	300

もうけの内訳を示す
のが、ボクの役割！

🔄 トレーニング 問題1-12～問題1-15

<メ モ>



いまさら聞けない！簿記論で使う算数～分数

(1) 分数の加算・減算（たしざん・ひきざん）

① 分母が同じ分数同士であれば、分子同士を加算・減算する。

$$\begin{array}{l|l} \text{(例)} \quad \frac{3}{5} + \frac{1}{5} = \frac{3+1}{5} & \text{(例)} \quad \frac{3}{5} - \frac{1}{5} = \frac{3-1}{5} \\ & = \frac{2}{5} \\ & = \frac{4}{5} \end{array}$$

② 分母が違う分数同士であれば、分母をそろえてから分子同士を加算・減算する。

$$\begin{aligned} \text{(例)} \quad \frac{1}{2} + \frac{1}{3} &= \frac{1 \times 3^*}{2 \times 3^*} + \frac{1 \times 2^*}{3 \times 2^*} \quad \Leftarrow \text{分母を6にそろえる（通分）} \\ &= \frac{3}{6} + \frac{2}{6} \\ &= \frac{5}{6} \end{aligned}$$

※ 分数の分母と分子に同じ数をかけても、もとの分数の大きさは変わらない。

(2) 分数の乗算（かけざん）

分数同士の乗算は、分母は分母同士、分子は分子同士乗ずる（掛け合わせる）。

$$\begin{aligned} \text{(例)} \quad \frac{1}{2} \times \frac{3}{5} &= \frac{1 \times 3}{2 \times 5} \\ &= \frac{3}{10} \end{aligned}$$

(3) 分数の除算（わりざん）

除算の場合、割る数の逆数（分子と分母を入れ替えた分数）を乗ずる。

$$\begin{aligned} \text{(例)} \quad \frac{1}{2} \div \frac{3}{5} &= \frac{1}{2} \times \frac{5}{3} \\ &= \frac{5}{6} \\ \frac{1}{2} \div 3 &= \frac{1}{2} \div \frac{3}{1} \\ &= \frac{1}{2} \times \frac{1}{3} \\ &= \frac{1}{6} \end{aligned}$$

第 2 回

< 今回の学習テーマ >

● テーマ2 営業手続

テーマ 2 営業手続

重要度 ★★★

日常行われる取引については、帳簿を設けて記録しておかなければいけません。テーマ2では、この記録方法について勉強します。ここでは、仕訳と転記のシステムと、試算表の作成方法をマスターしましょう。



このテーマの学習内容

テーマ番号	学 習 内 容	学習回数
2-1	取引の記録	入門Ⅰ第2回
2-2	仕訳と転記	入門Ⅰ第2回
2-3	試算表	入門Ⅰ第2回

2-1 取引の記録

1 勘定

簿記では、財産と損益の増減変化を記録・計算するために勘定（かんじょう）と呼ばれる記録・計算の単位を用います。この勘定は、下記に示すようにT字型によって借方・貸方に区分されます。

また、勘定は英語でアカウント(Account)と呼ばれていますので、これを略してa/cと表記することがあります。

勘		定	
借	方	貸	方

2 勘定科目

勘定には、その記録内容を簡潔明瞭に示す名称を付します。この名称のことを勘定科目（かんじょうかもく）といいます。勘定科目は、基本的に貸借対照表と損益計算書の項目に従って設定されます。

勘定科目		貸借対照表		勘定科目	
現金 商品 貸付 土地 など	{	資産	負債	{	借入金 など
			資本金		資本金 など
			当期純利益		
損益計算書					
給料 支払利息 など	{	費用	{	商品販売益	
		当期純利益		受取利息 受取手数料 など	

③ 勘定の記録ルール

- (1) 資産・負債および純資産の期首残高には「前期繰越」と記入します。
- (2) 記録をする日付を記入します。同じ日付が連続する場合には、「〃」の記号を付します。

資産の勘定

前期繰越	減 少
増 加	

収益の勘定

減 少	増 加 (発 生)

負債の勘定

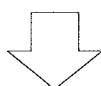
減 少	前期繰越
	増 加

費用の勘定

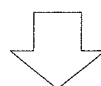
増 加 (発 生)	減 少

純資産の勘定

減 少	前期繰越
	増 加



貸借対照表と損益計算書は、各勘定の残高をもとにして作成します



貸借対照表

資 産	負 債
	資 本 金
	当期純利益

損益計算書

費 用	収 益
当期純利益	

④ 取引の記録方法

企業が行う取引には、いわゆる「原因と結果」ともいうべき2つの事実があります。簿記ではこの2つの事実を借方と貸方の2つに分解して、それぞれを勘定に記録していきます。

設 例 勘定と勘定の記録ルール

商品売買業を営む個人企業T商店の当期（×2年1月1日～×2年12月31日）に関する下記の【資料】に基づいて、現金勘定の記録を行いなさい。

【資料1】期首現金有高650円

【資料2】当期における取引

6月29日 借入金200円を現金で返済した。

10月15日 商品600円を900円で売り上げ、代金は現金で受け取った。

12月24日 従業員の給料140円を現金で支払った。

解 説 (単位：円)

(1) 現金勘定

現			金	
1/1	前期繰越	650	6/29	200
10/15		900	12/24	140

(2) 当期末の現金残高

借方合計額（650+900）－貸方合計額（200+140）＝1,210

トレーニング 問題2-1～問題2-2

<メ モ>



設 例 取引の記録方法

商品売買業を営む個人企業T商店の当期（×2年1月1日～×2年12月31日）に関する下記の【資料】に基づいて、各勘定に記録を行いなさい。

【資料1】期首における財産

現金650円 商品700円 土地450円 借入金800円 資本金1,000円

【資料2】当期における取引

6月29日 借入金200円を現金で返済した。

10月15日 商品600円を900円で売り上げ、代金は現金で受け取った。

12月24日 従業員の給料140円を現金で支払った。



解 説（単位：円）

(1) 各取引の記録方法

6月29日 借入金200を返済したため、現金200が減少します。

借入金（負債）の減少			現金（資産）の減少		
借 入 金			現 金		
6/29	200			6/29	200

10月15日 商品600が減少し、現金900が増加します。現金が300多く増加しているのは、商品の売上によってもうけがあったためです。

現金（資産）の増加			商品（資産）の減少		
現 金			商 品		
10/15	900			10/15	600

商品販売益（収益）の発生		
商 品 販 売 益		
	10/15	300

12月24日 給料140を支払ったため、現金140が減少します。

給料（費用）の発生		現金（資産）の減少	
給	料	現	金
12/24	140		12/24 140

(2) 各勘定の記録

現 金	
1/1 前期繰越 650	6/29 200
10/15 900	12/24 140

借 入 金	
6/29 200	1/1 前期繰越 800

商 品	
1/1 前期繰越 700	10/15 600

資 本 金	
	1/1 前期繰越1,000

土 地	
1/1 前期繰越 450	

給 料	
12/24 140	

商 品 販 売 益	
	10/15 300

➡トレーニング 問題2-3～問題2-4

2-2 仕訳と転記

1 仕訳と転記

取引を勘定に直接記録していくと、どうしても記録ミスや記録もれが生じてしまいます。そこで、これらが生じないようにするため、仕訳（しわけ）と転記（てんき）という記録システムが用いられます。

2 仕訳

仕訳とは、取引を勘定に記録する前に、(1)いかなる勘定に記録するのか、(2)その記録は借方が貸方か、(3)その金額はいくらか、の3つの事項を決定することをいいます。具体的には、借方に記録される勘定科目と金額を左側に、貸方に記録される勘定科目と金額を右側に示して決定します。

3 転記

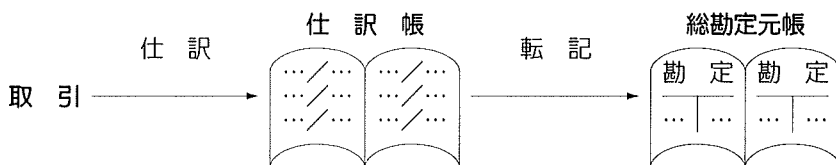
勘定への記録は、記録ミスや記録もれが生じないように、仕訳の内容を書き移すことによって行います。これを転記といいます。転記は基本的に、仕訳の借方金額を該当する勘定の借方に、貸方金額を該当する勘定の貸方にそれぞれ日付とともに書き移していきます。

ただし、これだけでは後で勘定の記録面を見た時に、その勘定に記録されている金額がいかなる取引（仕訳）に基づくものであるか分からなくなってしまいます。そこで、転記にあたっては日付、金額とともに仕訳の相手勘定も記入していくことになります。

なお、相手勘定が複数ある場合には、諸口（しよくち）と記入します。

4 仕訳帳と総勘定元帳

仕訳と勘定の記録は、それぞれ独立した帳簿で行われます。この帳簿を仕訳帳と総勘定元帳といいます。仕訳帳と総勘定元帳の関係は次のようになります。



設 例

商品売買業を営む個人企業T商店の当期（×2年1月1日～×2年12月31日）に関する下記の取引について、仕訳を行った上で勘定に転記しなさい。

【資料1】期首における財産

現金650円 商品700円 土地450円 借入金800円 資本金1,000円

【資料2】当期における取引

6月29日 借入金200円を現金で返済した。

10月15日 商品600円を900円で売り上げ、代金は現金で受け取った。

12月24日 従業員の給料140円を現金で支払った。

解 説（単位：円）

1 仕訳と転記の方法

(1) 勘定に記録する内容を仕訳で決定します。

6/29	借入金	200	現金	200
------	-----	-----	----	-----

現金	
借入金	

(2) 仕訳をしたら、その日付と金額を各勘定に転記します。

6/29	借入金	200	現金	200
------	-----	-----	----	-----

現金	
	6/29 200
借入金	
6/29 200	

(3) 取引の内容が分かるように相手勘定を記入します。

6/29	借入金	200	現金	200
------	-----	-----	----	-----

現金	
	6/29 借入金 200
借入金	
6/29 現金 200	

第2回講義

2 各取引ごとの仕訳と勘定の記録

6/29	借入金	200	現金	200
------	-----	-----	----	-----

10/15	現金	900	商品	600
			商品販売益	300

※ 現金勘定の相手勘定は、商品勘定と商品販売益勘定の2つですから、複数であることを意味する「諸口」と記入します。

12/24	給料	140	現金	140
-------	----	-----	----	-----

現金	
	6/29 借入金 200

借入金	
6/29 現金 200	

現金	
10/15 諸口 900	

商品	
	10/15 現金 600

商品販売益	
	10/15 現金 300

現金	
	12/24 給料 140

給料	
12/24 現金 140	

3 仕訳と勘定の記録

6/29	借入金	200	現金	200
10/15	現金	900	商品	600
			商品販売益	300
12/24	給料	140	現金	140

現金	
1/1 前期繰越	650
6/29 借入金	200
10/15 諸口	900
12/24 給料	140

商品	
1/1 前期繰越	700
10/15 現金	600

土地	
1/1 前期繰越	450

借入金	
6/29 現金	200
1/1 前期繰越	800

資本金	
1/1 前期繰越	1,000

商品販売益	
10/15 現金	300

給料	
12/24 現金	140

🔄 トレーニング 問題2-5～問題2-6

2-3 試算表

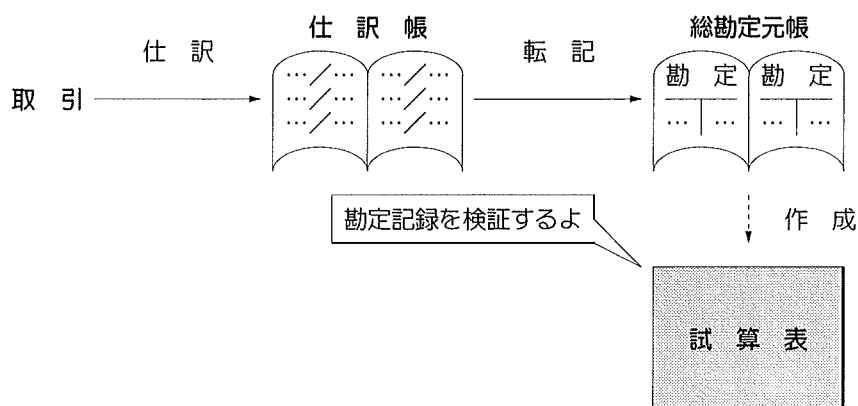
1 試算表

試算表とは、仕訳帳から総勘定元帳への転記が正しく行われたか否かを検証するために作成する勘定金額の一覧表です。

簿記では、1つの取引ごとに勘定の借方と貸方に記録をとっていきますので、常に勘定全体の借方合計額と貸方合計額は一致しています。この原理を利用して、仕訳帳から総勘定元帳への転記が正しく行われたか否かを検証するのが試算表です。つまり、試算表を作成した結果、借方合計額と貸方合計額が一致しなかった場合には、仕訳帳から総勘定元帳への転記が正しく行われていないということが分かるのです。

2 試算表の位置づけ

試算表は、帳簿外で作成されます。



参考 略号

試算表は、英語でトライアル・バランス (Trial Balance) と呼ばれていますので、これを略して T/B と表記することがあります。

③ 試算表の種類

1 試算表の種類

試算表は、総勘定元帳に設けられているすべての勘定の金額を集計することによって作成されます。試算表は、集計する金額によって次の3つに分類され、作成される時期に応じて、さらに細分されます。

(1) 合計試算表

各勘定の借方合計と貸方合計を集計した試算表です。

(2) 残高試算表

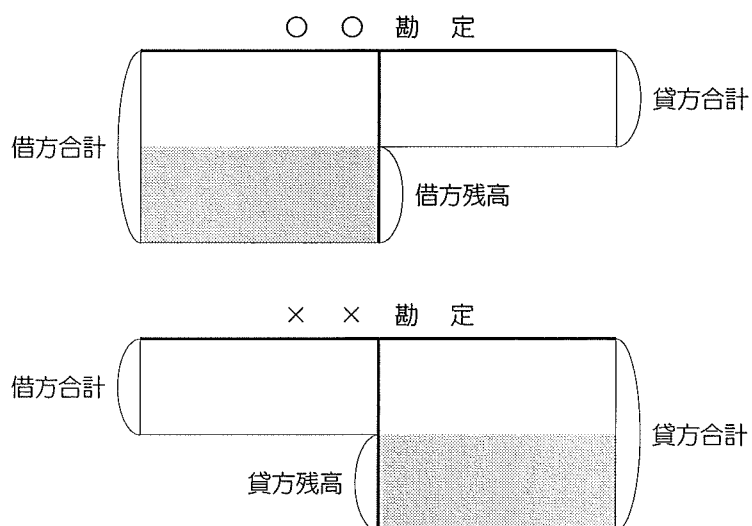
各勘定の残高を集計した試算表です。

(3) 合計残高試算表

各勘定の借方合計と貸方合計とその残高を集計した試算表です。

2 合計・残高の意味

合計とは、その勘定の借方・貸方に記入された金額の合計額を意味しています。残高とは、その勘定の借方合計額と貸方合計額の差額を意味しています。なお、残高が借方に生じることを借方残高、貸方に生じることを貸方残高といいます。



設 例

商品売買業を営む個人企業T商店の期末における各勘定の記録（単位：円）は下記のとおりである。この記録に基づいて、次に示した試算表を作成しなさい。

- (1) 合計試算表
- (2) 残高試算表
- (3) 合計残高試算表

現 金	
1/1 前期繰越 650	6/29 借入金 200
10/15 諸 口 900	12/24 給 料 140

商 品	
1/1 前期繰越 700	10/15 現 金 600

土 地	
1/1 前期繰越 450	

借 入 金	
6/29 現 金 200	1/1 前期繰越 800

資 本 金	
	1/1 前期繰越 1,000

商 品 販 売 益	
	10/15 現 金 300

給 料	
12/24 現 金 140	

解説 (単位: 円)

(1) 合計試算表

借方合計	勘定科目	貸方合計
1,550	現金	340
700	商品	600
450	土地	
200	借入金	800
	資本金	1,000
	商品販売益	300
140	給料	
3,040	合計	3,040

(2) 残高試算表

借方残高	勘定科目	貸方残高
1,210	現金	
100	商品	
450	土地	
	借入金	600
	資本金	1,000
	商品販売益	300
140	給料	
1,900	合計	1,900

(3) 合計残高試算表

借方残高	借方合計	勘定科目	貸方合計	貸方残高
1,210	1,550	現金	340	
100	700	商品	600	
450	450	土地		
	200	借入金	800	600
		資本金	1,000	1,000
		商品販売益	300	300
140	140	給料		
1,900	3,040	合計	3,040	1,900

トレーニング 問題2-7～問題2-8

留意点 残高試算表のT字形式

上記(2)残高試算表については、上記の雛型以外に下記のように示されることもあります。税理士試験の問題では、多くの場合、この形式で示されています。

残高試算表			(単位: 円)	
現金	1,210	借入金	600	
商品	100	資本金	1,000	
土地	450	商品販売益	300	
給料	140			
	1,900			1,900



いまさら聞けない！簿記論で使う算数～歩合と百分率

(1) 歩合

通常、試合の勝率や野球の打率などを「〇割〇分（〇厘）」というように表しますが、これを歩合といいます。「割」「分」「厘」はもとになるものに対して $1/10$ ($=0.1$)、 $1/100$ ($=0.01$)、 $1/1000$ ($=0.001$) を表します。

例えば、「3割6分」を小数で表すと、0.36となります。

(2) 百分率

百分率とは、割合の表し方の1つで「パーセント (%)」のことです。パーセント (%) は、もとになるものを100等分した場合の割合を表したものです。

例えば、空気中に含まれる窒素の割合はおよそ78%ですが、これは、もとになる空気を100等分したうちのおよそ78の割合が窒素であることを表します。また、空気を1として窒素の割合を小数で表すと、およそ0.78となります。

例えば、「0.36」を百分率で表すと、36%となります。

ちなみに、スーパーの特売などで定価の「3割引」「30%引」などと表示されますが、「3割」も「30%」も小数で表すと0.3ですから、どちらも「定価を1としてその0.3の割合を引いてお売りしています」という意味になります。

小数	0.1	0.25	0.5
分数	$\frac{1}{10} = \frac{10}{100}$	$\frac{1}{4} = \frac{25}{100}$	$\frac{1}{2} = \frac{5}{10} = \frac{50}{100}$
歩合	1割	2割5分	5割
百分率	10%	25%	50%

トレーニング

< 今回の学習内容 >

第1回講義 使用ページ 問題1-1～1-15

第2回講義 使用ページ 問題2-1～2-8

問題編

問題 1 - 1 簿記の予備知識

基礎

— 6 分 —

問1 次の文章に当てはまる適切な言葉を示しなさい。

1 簿記の意義

簿記とは、企業が行った ① を一定のルールに従って、② に記録することをいいます。

なお、ここでいう (②) には、③ と ④ の2つがあります

2 簿記の目的

- (1) 一定時点においてどれだけの財産があるか、つまり ⑤ を明らかにすること。
- (2) 一定期間の営業活動の結果どれだけもうかったか、つまり ⑥ を明らかにすること。

問2 次の(1)~(6)のうち、簿記上の取引に該当するものを選びなさい。

- (1) 商品500円について、盗難があった。
- (2) 土地800円を貸し付ける契約を結んだ。
- (3) 得意先が負担すべき手数料100円について、現金で立て替えた。
- (4) 従業員の給料200円を現金で支払った。
- (5) 地震により建物600円が損壊した。
- (6) 得意先から備品が贈呈された。

➡ 解答編 P 1

問題 1 - 2 財産(1)

基礎

— 1 分 —

下記の資産と負債に基づいて、純資産（資本）の金額を算定しなさい。

借入金 700円 土 地 800円 商 品 400円 現 金 500円

➡ 解答編 P 3

問題 1 - 3 財産(2)

基礎

- 2 分 -

下記の資産と負債に基づいて、純資産（資本）の金額を算定しなさい。

土地1,750円 現金1,940円 借入金3,290円
貸付金 670円 建物2,600円 商品 830円

➡ 解答編 P 3

問題 1 - 4 財産(3)

応用

- 2 分 -

下記の【資料】に基づいて、借入金の金額を算定しなさい。

【資料】

(1) 資産及び負債は次のとおりである。

建物1,840円 土地2,650円 貸付金1,380円
商品 960円 現金1,210円 借入金()円

(2) 純資産（資本）の金額は5,240円である。

➡ 解答編 P 4

問題 1 - 5 財産(4)

基礎

- 4 分 -

商品売買業を営む個人企業T商店に関する下記の【資料】に基づいて、【資料2】の各時点における純資産（資本）の金額を算定しなさい。

【資料1】 期首における資産及び負債

現金 500円 商品 400円 土地 800円 借入金 700円

【資料2】 当期における取引

- (1) 借入金250円を現金で返済した。
- (2) 商品300円を500円で売り上げ、代金は現金で受け取った。
- (3) 従業員の給料150円を現金で支払った。

➡ 解答編 P 6

問題 1 - 6 財産(5)

応用

— 5分 —

問1 下記の枠内の中から、資産を選びなさい。

問2 下記の枠内の中から、負債を選びなさい。

商品販売益	未払金	受取手数料	給料	現金
車両	支払家賃	備品	受取利息	貸付金
支払利息	商品	支払地代	未収金	支払手数料
建物	車両売却益	借入金	土地	受取家賃

➡ 解答編 P 8

問題 1 - 7 貸借対照表(1)

基礎

— 2分 —

商品売買業を営む個人企業T商店の期首(×2年1月1日)と期末(×2年12月31日)における財産に基づいて、期末の貸借対照表を作成しなさい。

【資料1】 期首における資産・負債

現金 500円 商品 400円 土地 800円 借入金 700円

【資料2】 期末における資産・負債

現金 600円 商品 100円 土地 800円 借入金 450円

➡ 解答編 P 9

問題 1－8 貸借対照表(2)

基礎

— 3分 —

商品売買業を営む個人企業S商店の期首（×2年1月1日）と期末（×2年12月31日）における財産に基づいて、期末の貸借対照表を作成しなさい。

【資料1】 期首における資産・負債

現金 1,820円 商品 300円 貸付金 150円 土地 650円
借入金 1,020円

【資料2】 期末における資産・負債

現金 1,285円 商品 200円 貸付金 50円 土地 1,300円
借入金 820円

➡ 解答編 P 10

問題 1－9 損益(1)

基礎

— 2分 —

下記の資料に基づいて、次の問に答えなさい。

問1 純資産額の増減額を求め、その際、どのような収益と費用が発生したかを示しなさい。

問2 当期純利益を算定しなさい。

【資料1】 期首における資産・負債

現金 500円 商品 400円 土地 800円 借入金 700円

【資料2】 当期における取引

- (1) 借入金250円を現金で返済した。
- (2) 商品300円を500円で売り上げ、代金は現金で受け取った。
- (3) 従業員の給料150円を現金で支払った。

➡ 解答編 P 12

問題 1-10 損益(2)

応用

— 8分 —

下記の資料に基づいて、次の問に答えなさい。

問1 純資産額の増減額を求め、その際、どのような収益と費用が発生したかを示しなさい。

問2 当期純利益を算定しなさい。

【資料1】 期首における資産・負債

現金 1,820円 商品 300円 貸付金 150円 土地 650円
借入金 1,020円

【資料】 当期における取引

- (1) 現金700円を借り入れた。
- (2) 商品1,500円を仕入れ、代金は現金で支払った。
- (3) 商品1,600円を2,400円で売り上げ、代金は現金で受け取った。
- (4) 現金400円を貸し付けた。
- (5) 土地1,000円を購入し、代金は現金で支払った。
- (6) 貸付金500円を回収し、利息5円とともに現金で受け取った。
- (7) 土地350円を395円で売却し、代金は現金で受け取った。
- (8) 従業員の給料450円を現金で支払った。
- (9) 店舗の家賃275円を現金で支払った。
- (10) 借入金900円を返済し、利息10円とともに現金で支払った。

➡ 解答編 P 14

問題 1-11 損益(3)

応用

— 8分 —

問1 下記の枠内の中から、収益を選びなさい。

問2 下記の枠内の中から、費用を選びなさい。

商品販売益	未払金	受取手数料	給料	現金
車両	支払家賃	備品	受取利息	貸付金
支払利息	商品	支払地代	未収金	支払手数料
建物	車両売却益	借入金	土地	受取家賃

➡ 解答編 P 19

問題 1 - 12 損益計算書(1)**基礎**

— ⌚ 1 分 —

商品売買業を営む個人企業 T 商店の当期（× 2 年 1 月 1 日～× 2 年 12 月 31 日）に関する下記の収益と費用に基づいて、損益計算書を作成しなさい。

商品販売益 200円 給 料 150円

 解答編 P 20**問題 1 - 13** 損益計算書(2)**基礎**

— ⌚ 2 分 —

商品売買業を営む個人企業 S 商店の当期（× 2 年 1 月 1 日～× 2 年 12 月 31 日）に関する下記の収益と費用に基づいて、損益計算書を作成しなさい。

商品販売益 800円 受 取 利 息 5円 土地売却益 45円 給 料 450円
支 払 家 賃 275円 支 払 利 息 10円

 解答編 P 21

問題 1 - 14 貸借対照表(3)・損益計算書(3)

応用

— 8 分 —

次の文章に当てはまる適切な言葉を示しなさい。

1 貸借対照表

① とは、一定時点における財産を一覧表にしたものをいいます。

(①) では、② を左側に、③ と ④ とを右側に具体的な名称を付して記載します。

なお、純資産については ⑤ と記載します。

簿記では左側のことを ⑥ 、右側のことを ⑦ といいます。貸借対照表においては、(⑥) に記載される項目が資産、(⑦) に記載される項目が負債と純資産ということになります。

なお、貸借対照表の (⑥) 合計額と (⑦) 合計額は必ず一致します。

2 損益計算書

⑧ とは、一定期間における損益を一覧表にしたものをいいます。

(⑧) では、⑨ を借方に、⑩ を貸方に具体的な名称を付して記載します。そして、両者の差額を借方に ⑪ と記載します。

なお、損益計算書の借方合計額と貸方合計額は必ず一致します。

➡ 解答編 P 22

問題 1 - 15 貸借対照表(4)・損益計算書(4)

応用

— 6 分 —

問1 下記の資料に基づいて、当期純利益を求めなさい。

【資料】 当期における収益および費用

商品販売益5,000円 受取利息600円、受取手数料400円、受取家賃3,500円

水道光熱費1,450円、給料2,500円、支払地代1,800円、支払利息300円、車両売却損450円

問2 下記の資料に基づいて、当期純利益を求めなさい。

【資料1】 当期首における資産および負債

現金2,500円、商品1,500円、貸付金9,000円、建物8,000円、車両3,000円、借入金6,000円

【資料2】 当期末における資産および負債

現金4,750円、商品2,250円、貸付金9,000円、建物8,000円、借入金3,000円

➡ 解答編 P 23

問題 2 - 1 取引の記録(1)**基礎**

— 時計 2 分 —

商品売買業を営む個人企業 T 商店の当期（× 2 年 1 月 1 日～× 2 年 12 月 31 日）に関する下記の資料に基づいて、現金勘定の記録を行いなさい。

【資料 1】 期首現金有高 500 円

【資料 2】 当期における取引

6 月 29 日 借入金 250 円を現金で返済した。

10 月 15 日 商品 300 円を 500 円で売り上げ、代金は現金で受け取った。

12 月 24 日 従業員の給料 150 円を現金で支払った。

 解答編 P 24**問題 2 - 2** 取引の記録(2)**基礎**

— 時計 5 分 —

商品売買業を営む個人企業 S 商店の当期（× 2 年 1 月 1 日～× 2 年 12 月 31 日）に関する下記の資料に基づいて、現金勘定の記録を行いなさい。

【資料 1】 期首現金有高 1,820 円

【資料 2】 当期における取引

1 月 15 日 現金 700 円を借り入れた。

2 月 11 日 商品 1,500 円を仕入れ、代金は現金で支払った。

3 月 20 日 商品 1,600 円を 2,400 円で売り上げ、代金は現金で受け取った。

4 月 29 日 現金 400 円を貸し付けた。

5 月 3 日 土地 1,000 円を購入し、代金は現金で支払った。

7 月 20 日 貸付金 500 円を回収し、利息 5 円とともに現金で受け取った。

9 月 23 日 土地 350 円を 395 円で売却し、代金は現金で受け取った。

10 月 10 日 従業員の給料 450 円を現金で支払った。

11 月 23 日 店舗の家賃 275 円を現金で支払った。

12 月 23 日 借入金 900 円を返済し、利息 10 円とともに現金で支払った。

 解答編 P 24

問題 2 - 3 取引の記録(3)

基礎

— 5分 —

商品売買業を営む個人企業T商店の当期（×2年1月1日～×2年12月31日）に関する下記の資料に基づいて、各勘定に記録を行いなさい。

【資料1】 期首における資産・負債

現金 500円 商品 400円 土地 800円 借入金 700円

【資料2】 当期における取引

6月29日 借入金250円を現金で返済した。

10月15日 商品300円を500円で売り上げ、代金は現金で受け取った。

12月24日 従業員の給料150円を現金で支払った。

➡ 解答編 P 25

問題 2 - 4 取引の記録(4)

基礎

— 10分 —

商品売買業を営む個人企業S商店の当期（×2年1月1日～×2年12月31日）に関する下記の資料に基づいて、各勘定に記録を行いなさい。

【資料1】 期首における資産・負債

現金 1,820円 商品 300円 貸付金 150円 土地 650円
借入金 1,020円

【資料2】 当期における取引

1月15日 現金700円を借り入れた。

2月11日 商品1,500円を仕入れ、代金は現金で支払った。

3月20日 商品1,600円を2,400円で売り上げ、代金は現金で受け取った。

4月29日 現金400円を貸し付けた。

5月3日 土地1,000円を購入し、代金は現金で支払った。

7月20日 貸付金500円を回収し、利息5円とともに現金で受け取った。

9月23日 土地350円を395円で売却し、代金は現金で受け取った。

10月10日 従業員の給料450円を現金で支払った。

11月23日 店舗の家賃275円を現金で支払った。

12月23日 借入金900円を返済し、利息10円とともに現金で支払った。

➡ 解答編 P 26

問題 2 - 5 仕訳と転記(1)

基礎

— 5分 —

商品売買業を営む個人企業T商店の当期(×2年1月1日～×2年12月31日)に関する下記の取引について、仕訳を行ったうえで勘定に転記しなさい。

【資料1】 期首における資産・負債

現金 500円 商品 400円 土地 800円 借入金 700円

【資料2】 当期における取引

6月29日 借入金250円を現金で返済した。

10月15日 商品300円を500円で売り上げ、代金は現金で受け取った。

12月24日 従業員の給料150円を現金で支払った。

➡ 解答編 P 30

問題 2 - 6 仕訳と転記(2)

基礎

— 15分 —

商品売買業を営む個人企業S商店の当期(×2年1月1日～×2年12月31日)に関する下記の取引について、仕訳を行ったうえで勘定に転記しなさい。

【資料1】 期首における資産・負債

現金 1,820円 商品 300円 貸付金 150円 土地 650円
借入金 1,020円

【資料2】 当期における取引

1月15日 現金700円を借り入れた。

2月11日 商品1,500円を仕入れ、代金は現金で支払った。

3月20日 商品1,600円を2,400円で売り上げ、代金は現金で受け取った。

4月29日 現金400円を貸し付けた。

5月3日 土地1,000円を購入し、代金は現金で支払った。

7月20日 貸付金500円を回収し、利息5円とともに現金で受け取った。

9月23日 土地350円を395円で売却し、代金は現金で受け取った。

10月10日 従業員の給料450円を現金で支払った。

11月23日 店舗の家賃275円を現金で支払った。

12月23日 借入金900円を返済し、利息10円とともに現金で支払った。

➡ 解答編 P 32

問題 2 - 7 試算表(1)

基礎

— 10分 —

商品売買業を営む個人企業 T 商店に関する下記の勘定記録に基づいて、次の問 1 ～ 問 3 に答えなさい。

問 1 合計試算表を作成しなさい。

問 2 残高試算表を作成しなさい。

問 3 合計残高試算表を作成しなさい。

現 金 (単位: 円)	
1/1 前期繰越 500	6/29 借入金 250
10/15 諸 〇 500	12/24 給 料 150

借 入 金 (単位: 円)	
6/29 現 金 250	1/1 前期繰越 700

商 品 (単位: 円)	
1/1 前期繰越 400	10/15 現 金 300

資 本 金 (単位: 円)	
	1/1 前期繰越 1,000

土 地 (単位: 円)	
1/1 前期繰越 800	

給 料 (単位: 円)	
12/24 現 金 150	

商 品 販 売 益 (単位: 円)	
	10/15 現 金 200

➡ 解答編 P 34

問題 2 - 8 試算表(2)

基礎

— 10分 —

商品売買業を営む個人企業S商店に関する下記の勘定記録に基づいて、次の問1～問3に答えなさい。

問1 合計試算表を作成しなさい。

問2 残高試算表を作成しなさい。

問3 合計残高試算表を作成しなさい。

現 金 (単位:円)	
1/1 前期繰越1,820	2/11 商 品1,500
1/15 借 入 金 700	4/29 貸 付 金 400
3/20 諸 □2,400	5/3 土 地1,000
7/20 諸 □ 505	10/10 給 料 450
9/23 諸 □ 395	11/23 支払家賃 275
	12/23 諸 □ 910

借 入 金 (単位:円)	
12/23 現 金 900	1/1 前期繰越1,020
	1/15 現 金 700

商 品 (単位:円)	
1/1 前期繰越 300	3/20 現 金1,600
2/11 現 金1,500	

資 本 金 (単位:円)	
	1/1 前期繰越1,900

貸 付 金 (単位:円)	
1/1 前期繰越 150	7/20 現 金 500
4/29 現 金 400	

土 地 (単位:円)	
1/1 前期繰越 650	9/23 現 金 350
5/3 現 金1,000	

給 料 (単位:円)	
10/10 現 金 450	

商 品 販 売 益 (単位:円)	
	3/20 現 金 800

支 払 家 賃 (単位:円)	
11/23 現 金 275	

受 取 利 息 (単位:円)	
	7/20 現 金 5

支 払 利 息 (単位:円)	
12/23 現 金 10	

土 地 売 却 益 (単位:円)	
	9/23 現 金 45

解答編

問題 1 - 1 簿記の予備知識

【解 答】

問 1

①	取引	④	総勘定元帳
②	帳簿	⑤	財産の状態
③	仕訳帳	⑥	経営成績

※ ③および④は順不同でも正解となる。

問 2

(1)、(3)、(4)、(5)、(6)

【解答への道】

問1

1 簿記の意義

簿記とは、企業が行った **取引** を一定のルールに従って、**帳簿** に記録することをいいます。

なお、ここでいう **帳簿** には、**仕訳帳** と **総勘定元帳** の2つがあります。

2 簿記の目的

- (1) 一定時点においてどれだけの財産があるか、つまり **財産の状態** を明らかにすること。
- (2) 一定期間の営業活動の結果どれだけもうかったか、つまり **経営成績** を明らかにすること。

問2

簿記上の取引とは、**財産に増減変化をもたらす事項**をいう。

- (1) 商品500円という財産が減少しているため、簿記上の取引に該当する。
- (2) 契約を結んだだけで、財産に増減変化がないため、簿記上の取引には該当しない。
- (3) 現金100円という財産が減少しているため、簿記上の取引に該当する。
- (4) 現金200円という財産が減少しているため、簿記上の取引に該当する。
- (5) 建物600円という財産が減少しているため、簿記上の取引に該当する。
- (6) 備品という財産が増加しているため、簿記上の取引に該当する。

問題 1 - 2 財産(1)

【解 答】

1,000 円

【解答への道】

1 資産と負債の金額

(1) 資産：現金500円＋商品400円＋土地800円＝1,700円

(2) 負債：借入金700円

2 純資産（資本）の金額

資産1,700円－負債700円＝純資産（資本）1,000円

問題 1 - 3 財産(2)

【解 答】

4,500 円

【解答への道】

1 資産と負債の金額

(1) 資産：現金1,940円＋商品830円＋貸付金670円＋建物2,600円＋土地1,750円＝7,790円

(2) 負債：借入金3,290円

2 純資産（資本）の金額

資産7,790円－負債3,290円＝純資産（資本）4,500円

問題 1 - 4 財産(3)

【解 答】

2,800 円

【解答への道】

1 資産と負債の金額

(1) 資産：現金1,210円＋商品960円＋貸付金1,380円＋建物1,840円＋土地2,650円＝8,040円

(2) 負債：借入金（ ）円

2 負債（借入金）の金額

資産8,040円－純資産（資本）5,240円＝負債2,800円

3 資産・負債および純資産（資本）の関係

資 産	負 債	純資産（資本）
現金 1,210円	借入金 2,800円	⇄差額 5,240円
商 品 960円		
貸付金 1,380円		
建 物 1,840円		
土 地 2,650円		
8,040円		

<メ モ>

問題 1 - 5 財産(4)

【解 答】

(1) 円

(2) 円

(3) 円

【解答への道】

1 期首における状況

資 産	負 債	純資産（資本）
現金 500円 商品 400円 土地 800円 1,700円	借入金 700円	1,000円

2 当期における状況

(1) 借入金の返済

資 産	負 債	純資産（資本）
現金 500円 △250円 商品 400円 土地 800円 1,450円	借入金 700円 △250円 450円	1,000円

純資産（資本）の増減なし

(2) 商品の売り上げ

資 産	負 債	純資産（資本）
現金 250円 +500円 商品 400円 △300円 土地 800円 1,650円	借入金 450円	800円 +200円 1,200円

純資産（資本）が増加

(3) 給料の支払い

資 産	負 債	純資産（資本）
現金 750円 △150円 商品 100円 土地 800円 1,500円	借入金 450円	1,200円 △150円 1,050円

純資産（資本）が減少

問題 1－6 財産(5)

【解 答】

問 1

現金、商品、未収金、貸付金、建物、備品、車両、土地

問 2

未払金、借入金

【解答への道】

問 1 未収金：商品以外を代金後払いで売却した場合に生ずる売却代金を後日受け取る権利。

貸付金：金銭を取引先等に貸し付けた場合に生ずる後日返済を受ける権利。

問 2 未払金：商品以外を代金後払いで購入した場合に生ずる購入代金を後日支払う義務。

借入金：金銭を銀行等から借り入れた場合に生ずる後日返済する義務。

(参考)

財産とは、資産、負債および純資産（資本）の総称をいいます。

(1) 資産

資産とは、企業が所有する物や権利（債権）、つまりプラスの財産のことをいいます。

(2) 負債

負債とは、将来返済しなければならない義務（債務）、つまりマイナスの財産のことをいいます。

(3) 純資産（資本）

純資産とは、資産と負債の差額、つまり正味の財産のことをいいます。資産から負債を差し引くと純資産が算定されます。

問題 1－7 貸借対照表(1)

【解 答】

貸 借 対 照 表					
× 2 年 12 月 31 日				(単位：円)	
資 産	現 金	600	負 債 純 資 産	借 入 金	450
	商 品	100		資 本 金	1,000
	土 地	800		当期純利益	50
合 計		1,500	合 計		1,500

【解答への道】

1 期首純資産（資本）の金額

（現金500円＋商品400円＋土地800円）－借入金700円＝1,000円

2 期末純資産（資本）の金額

（現金600円＋商品100円＋土地800円）－借入金450円＝1,050円

3 当期純利益の金額

期末純資産（資本）1,050円－期首純資産（資本）1,000円＝50円

問題 1 - 8 貸借対照表(2)

【解 答】

貸 借 対 照 表					
× 2 年 12 月 31 日					
(単位：円)					
資 産	現 金	1,285	負 債	借 入 金	820
	商 品	200		資 本 金	1,900
	貸 付 金	50		当 期 純 利 益	115
	土 地	1,300			
合 計		2,835	合 計		2,835

【解答への道】

1 期首純資産（資本）の金額

(現金1,820円＋商品300円＋貸付金150円＋土地650円)－借入金1,020円＝1,900円

2 期末純資産（資本）の金額

(現金1,285円＋商品200円＋貸付金 50円＋土地1,300円)－借入金820円＝2,015円

3 当期純利益の金額

期末資本2,015円－期首資本1,900円＝115円

<メ モ>

問題 1 - 9 損益(1)

【解 答】

問 1

	純資産の増減額	収益または費用の具体的な名称
(1)	0 円	
(2)	+ 200 円	商品販売益
(3)	△ 150 円	給料

問 2

50 円

【解答への道】（単位：円）

問 1

資 産		負 債		純 資 産	
◇ 期 首	現 金	500	借入金	700	1,000
	商 品	400			
	土 地	800			
		1,700			

(1) 借入金返済

現 金	500	借入金	700	
	△250		△250	
商 品	400			
土 地	800		450	
	1,450			1,000

純資産に変動はありません。つまり、収益も費用も発生していません。

(2) 商品売上

現金	250		
	+500		
商品	400	借入金	450
	△300		
土地	800		
	<u>1,650</u>		
			1,000
			+ 200
			<u>1,200</u>

純資産が200増加しています。これは、商品の売上によって200もうかったことを意味します。つまり、この取引によって商品販売益という収益が200発生したことになります。

(3) 給料支払

現金	750		
	△150		
商品	100	借入金	450
土地	800		
	<u>1,500</u>		
			1,200
			△ 150
			<u>1,050</u>

純資産が150減少しています。これは給料の支払いによって150損したことを意味します。つまり、この取引によって給料という費用が150発生したことになります。

問2

商品販売益200－給料150＝当期純利益50

問題 1－10 損益(2)

【解 答】

問 1

	純資産の増減額	収益または費用の具体的な名称
(1)	0 円	
(2)	0 円	
(3)	+ 800 円	商品販売益
(4)	0 円	
(5)	0 円	
(6)	+ 5 円	受取利息
(7)	+ 45 円	土地売却益
(8)	△ 450 円	給料
(9)	△ 275 円	支払家賃
(10)	△ 10 円	支払利息

問 2

115 円

【解答への道】（単位：円）

問 1

	資 産	負 債	純 資 産
◇ 期 首	現金 1,820 商品 300 貸付金 150 土 地 650 2,920	借入金 1,020	1,900

(1) 現金の借入

現金 1,820 + 700 商品 300 貸付金 150 土 地 650 3,620	借入金 1,020 + 700 1,720	1,900
--	---	--------------------

純資産に変動はありません。つまり、収益も費用も発生していません。

(2) 現金仕入

現金 2,520 △1,500 商品 300 +1,500 貸付金 150 土 地 650 3,620	借入金 1,720	1,900
---	------------------------	--------------------

純資産に変動はありません。つまり、収益も費用も発生していません。

(3) 商品売上

現金	1,020	借入金	1,720	
	+2,400			
商品	1,800			
	△1,600			
貸付金	150			
土地	650			
	4,420			
				1,900
				+ 800
				2,700

純資産が800増加しています。これは、商品の売上によって800もうかったことを意味します。つまり、この取引によって商品販売益という収益が800発生したことになります。

(4) 現金の貸付

現金	3,420	借入金	1,720	
	△ 400			
商品	200			
貸付金	150			
	+ 400			
土地	650			
	4,420			
				2,700

純資産に変動はありません。つまり、収益も費用も発生していません。

(5) 土地の購入

現金	3,020	借入金	1,720	
	△1,000			
商品	200			
貸付金	550			
土地	650			
	+1,000			
	4,420			
				2,700

純資産に変動はありません。つまり、収益も費用も発生していません。

(6) 貸付金回収

現金 2,020 + 505 商品 200 貸付金 550 △ 500 土地 1,650 4,425	借入金 1,720	2,700 + 5 2,705
--	-----------	-----------------------

純資産が5増加しています。これは、利息の受取によって5もうかったことを意味します。つまり、この取引によって受取利息という収益が5発生したことになります。

(7) 土地の売却

現金 2,525 + 395 商品 200 貸付金 50 土地 1,650 △ 350 4,470	借入金 1,720	2,705 + 45 2,750
---	-----------	------------------------

純資産が45増加しています。これは、土地の売却によって45もうかったことを意味します。つまり、この取引によって土地売却益という収益が45発生したことになります。

(8) 給料の支払

現金 2,920 △ 450 商品 200 貸付金 50 土地 1,300 4,020	借入金 1,720	2,750 △ 450 2,300
--	-----------	-------------------------

純資産が450減少しています。これは、給料の支払によって450損したことを意味します。つまり、この取引によって給料という費用が450発生したことになります。

(9) 家賃の支払

現金 2,470 △ 275 商品 200 貸付金 50 土地 1,300 3,745	借入金 1,720	2,300 △ 275 2,025
--	-----------	-------------------------

純資産が275減少しています。これは、給料の支払によって275損したことを意味します。つまり、この取引によって支払家賃という費用が275発生したことになります。

(10) 借入金返済

現金 2,195 △ 910 商品 200 貸付金 50 土地 1,300 2,835	借入金 1,720 △ 900 820	2,025 △ 10 2,015
--	---------------------------	------------------------

純資産が10減少しています。これは、利息の支払によって10損したことを意味します。つまり、この取引によって支払利息という費用が10発生したことになります。

問2

(1) 収益

商品販売益800 + 受取利息5 + 土地売却益45 = 850

(2) 費用

給料450 + 支払家賃275 + 支払利息10 = 735

(3) 当期純利益

(1) - (2) = 115

問題 1－11 損益(3)

【解 答】

問 1

商品販売益、受取利息、受取手数料、受取家賃、車両売却益

問 2

給料、支払地代、支払家賃、支払利息、支払手数料

【解答への道】

問 1 受取利息：銀行預金・貸付金等に対する利息の受取額。

問 2 支払利息：借入金等に対する利息の支払額。

(参考)

損益とは、純資産（資本）の変動原因であり、次に示す収益と費用の総称をいいます。

(1) 収益

収益とは、純資産（資本）を増加させる原因のことをいいます。いいかえれば、当期において企業がもうかった原因が収益です。

(2) 費用

費用とは、純資産（資本）を減少させる原因のことをいいます。いいかえれば、当期において企業が損をした原因が費用です。

問題 1-12 損益計算書(1)

【解 答】

損 益 計 算 書						
× 2 年 1 月 1 日 ~ × 2 年 12 月 31 日						
(単位：円)						
費 用	給	料	150	収 益	商品販売益	200
	当 期 純 利 益		50			
合 計			200	合 計 200		

【解答への道】

1 収益および費用

(1) 収益：商品販売益200円

(2) 費用：給料150円

2 当期純利益

収益200円－費用150円＝当期純利益50円

問題 1-13 損益計算書(2)

【解 答】

損 益 計 算 書					
×2年1月1日～×2年12月31日				(単位：円)	
費 用	給 料	450	収 益	商品販売益	800
	支 払 家 賃	275		受 取 利 息	5
	支 払 利 息	10		土地売却益	45
利 益	当期純利益	115			
合 計		850	合 計		850

【解答への道】

1 収益および費用

(1) 収益：商品販売益800円＋受取利息5円＋土地売却益45円＝850円

(2) 費用：給料450円＋支払家賃275円＋支払利息10円＝735円

2 当期純利益

収益850円－費用735円＝当期純利益115円

問題 1 - 14 貸借対照表(3)・損益計算書(3)

【解 答】

①	貸借対照表	⑦	貸方
②	資産	⑧	損益計算書
③	負債	⑨	費用
④	純資産	⑩	収益
⑤	資本金	⑪	当期純利益
⑥	借方		

【解答への道】

1 貸借対照表

貸借対照表とは、一定時点における財産を一覧表にしたものをいいます。

(貸借対照表)では、**資産**を左側に、**負債**と**純資産**とを右側に具体的な名称を付して記載します。なお、純資産については**資本金**と記載します。

簿記では左側のことを**借方**、右側のことを**貸方**といいます。貸借対照表においては、(借方)に記載される項目が資産、(貸方)に記載される項目が負債と純資産ということになります。

なお、貸借対照表の(借方)合計額と(貸方)合計額は必ず一致します。

2 損益計算書

損益計算書とは、一定期間における損益を一覧表にしたものをいいます。

(損益計算書)では、**費用**を借方に、**収益**を貸方に具体的な名称を付して記載します。そして、両者の差額を借方に**当期純利益**と記載します。

なお、損益計算書の借方合計額と貸方合計額は必ず一致します。

問題 1 - 15 貸借対照表(4)・損益計算書(4)

【解 答】

問1

3,000

 円問2

3,000

 円

【解答への道】

問1

収益－費用＝当期純利益という関係から、【資 料】の勘定科目を収益と費用に分けて算定する。

(1) 収益の合計

商品販売益5,000円＋受取利息600円＋受取手数料400円＋受取家賃3,500円＝9,500円

(2) 費用の合計

水道光熱費1,450円＋給料2,500円＋支払地代1,800円

＋支払利息300円＋車両売却損450円＝6,500円

(3) 当期純利益

(1)－(2)＝3,000円

問2

期末純資産（資本）－期首純資産（資本）＝当期純利益という関係から、【資料1】及び【資料2】より純資産を算定する。

(1) 期末純資産

資産（現金4,750円＋商品2,250円＋貸付金9,000円＋建物8,000円）

－負債（借入金3,000円）＝21,000円

(2) 期首純資産

資産（現金2,500円＋商品1,500円＋貸付金9,000円＋建物8,000円＋車両3,000円）

－負債（借入金6,000円）＝18,000円

(3) 当期純利益

(1)－(2)＝3,000円

問題 2 - 1

 取引の記録(1)

【解 答】

現		金 (単位 : 円)	
1/1 前期繰越	500	6/29	250
10/15	500	12/24	150

問題 2 - 2

 取引の記録(2)

【解 答】

現		金 (単位 : 円)	
1/1 前期繰越	1,820	2/11	1,500
1/15	700	4/29	400
3/20	2,400	5/3	1,000
7/20	505	10/10	450
9/23	395	11/23	275
		12/23	910

問題 2 - 3 取引の記録(3)

【解 答】

現 金 (単位:円)	
1/1 前期繰越 500	6/29 250
10/15 500	12/24 150

商 品 (単位:円)	
1/1 前期繰越 400	10/15 300

土 地 (単位:円)	
1/1 前期繰越 800	

給 料 (単位:円)	
12/24 150	

借 入 金 (単位:円)	
6/29 250	1/1 前期繰越 700

資 本 金 (単位:円)	
	1/1 前期繰越1,000

商 品 販 売 益 (単位:円)	
	10/15 200

問題 2 - 4 取引の記録(4)

【解 答】

現 金 (単位:円)	
1/1 前期繰越	1,820
1/15	700
3/20	2,400
7/20	505
9/23	395

商 品 (単位:円)	
1/1 前期繰越	300
2/11	1,500

貸 付 金 (単位:円)	
1/1 前期繰越	150
4/29	400

土 地 (単位:円)	
1/1 前期繰越	650
5/3	1,000

給 料 (単位:円)	
10/10	450

支 払 家 賃 (単位:円)	
11/23	275

支 払 利 息 (単位:円)	
12/23	10

借 入 金 (単位:円)	
12/23	900

資 本 金 (単位:円)	
	1/1 前期繰越
	1,900

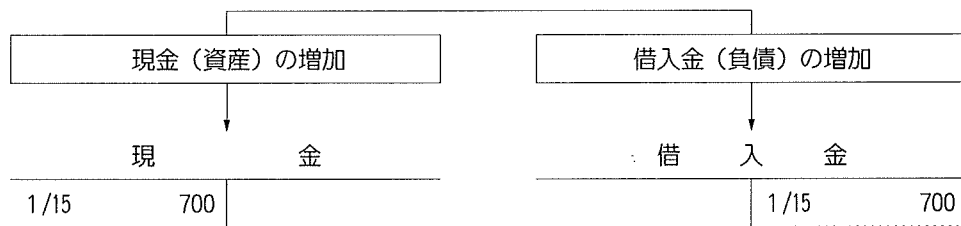
商 品 販 売 益 (単位:円)	
	3/20
	800

受 取 利 息 (単位:円)	
	7/20
	5

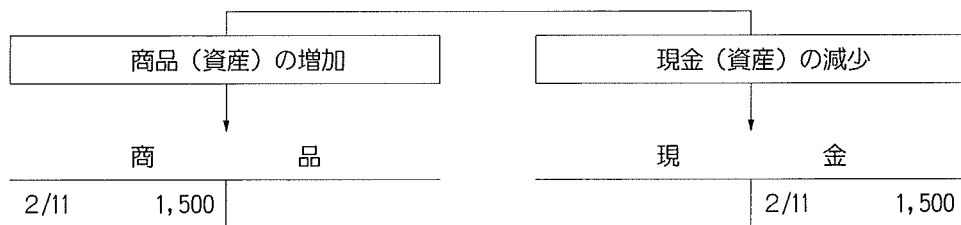
土 地 売 却 益 (単位:円)	
	9/23
	45

【解答への道】（単位：円）

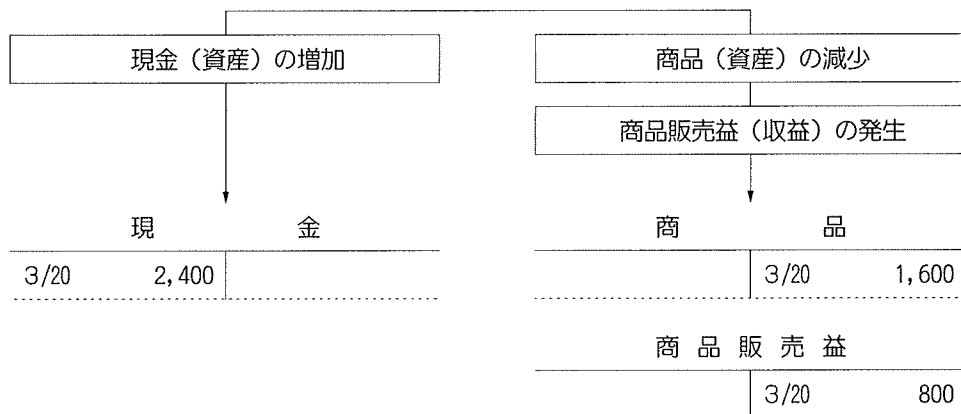
1月15日



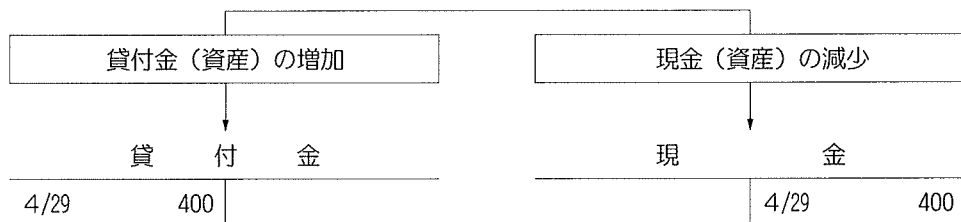
2月11日



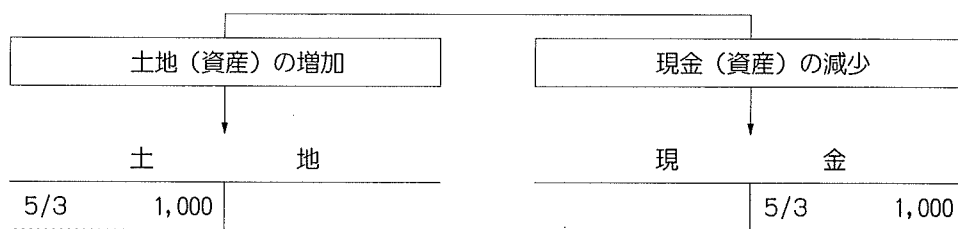
3月20日



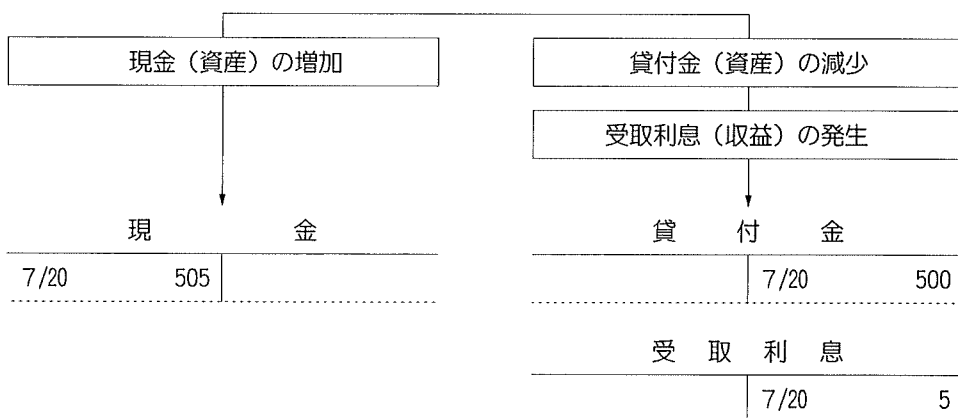
4月29日



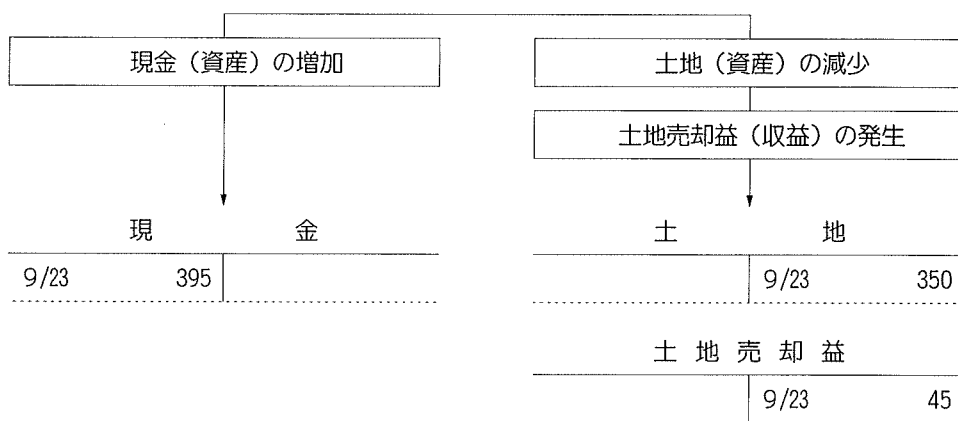
5月3日



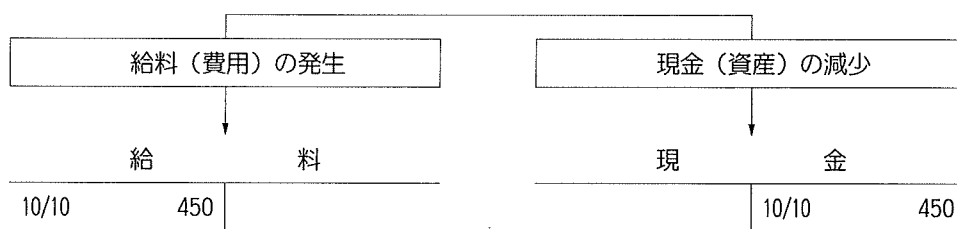
7月20日



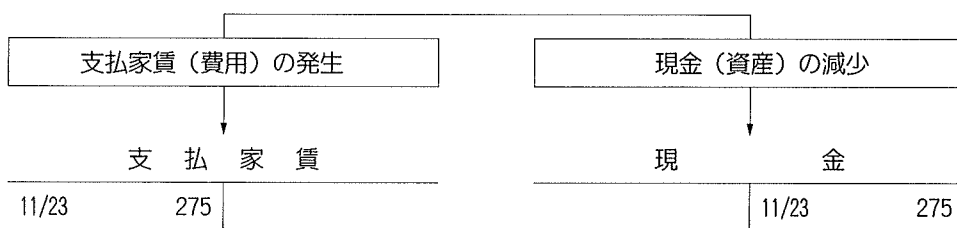
9月23日



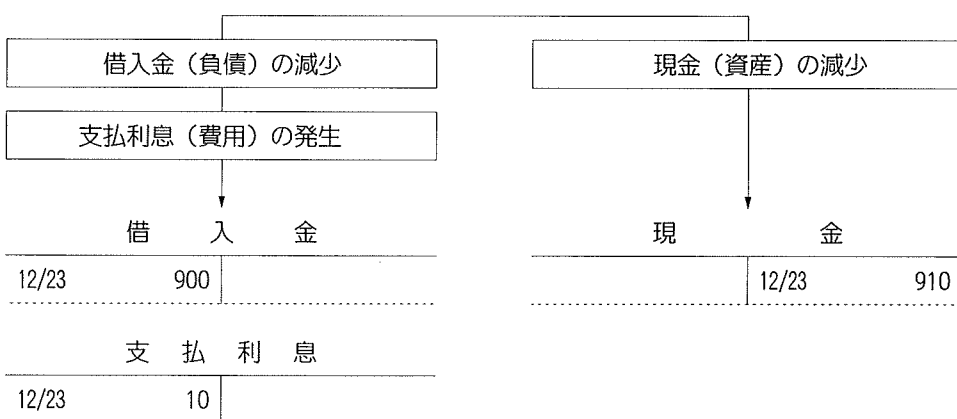
10月10日



11月23日



12月23日



問題 2 - 5 仕訳と転記(1)

【解 答】

〈仕 訳 帳〉

(単位：円)

日 付	借 方 科 目	金 額	貸 方 科 目	金 額
6/29	借 入 金	250	現 金	250
10/15	現 金	500	商 品	300
			商 品 販 売 益	200
12/24	給 料	150	現 金	150

〈総勘定元帳〉

現 金 (単位：円)	
1/1 前期繰越 500	6/29 借 入 金 250
10/15 諸 □ 500	12/24 給 料 150

借 入 金 (単位：円)	
6/29 現 金 250	1/1 前期繰越 700

商 品 (単位：円)	
1/1 前期繰越 400	10/15 現 金 300

資 本 金 (単位：円)	
	1/1 前期繰越 1,000

土 地 (単位：円)	
1/1 前期繰越 800	

給 料 (単位：円)	
12/24 現 金 150	

商 品 販 売 益 (単位：円)	
	10/15 現 金 200

<メ モ>

問題 2 - 6

 仕訳と転記(2)

【解 答】

〈仕 訳 帳〉

(単位：円)

日 付	借 方 科 目	金 額	貸 方 科 目	金 額
1/15	現 金	700	借 入 金	700
2/11	商 品	1,500	現 金	1,500
3/20	現 金	2,400	商 品	1,600
			商 品 販 売 益	800
4/29	貸 付 金	400	現 金	400
5/3	土 地	1,000	現 金	1,000
7/20	現 金	505	貸 付 金	500
			受 取 利 息	5
9/23	現 金	395	土 地	350
			土 地 売 却 益	45
10/10	給 料	450	現 金	450
11/23	支 払 家 賃	275	現 金	275
12/23	借 入 金	900	現 金	910
	支 払 利 息	10		

〈総勘定元帳〉

現 金 (単位:円)	
1/1 前期繰越1,820	2/11 商 品1,500
1/15 借 入 金 700	4/29 貸 付 金 400
3/20 諸 □2,400	5/3 土 地1,000
7/20 諸 □ 505	10/10 給 料 450
9/23 諸 □ 395	11/23 支払家賃 275
	12/23 諸 □ 910

商 品 (単位:円)	
1/1 前期繰越 300	3/20 現 金1,600
2/11 現 金1,500	

貸 付 金 (単位:円)	
1/1 前期繰越 150	7/20 現 金 500
4/29 現 金 400	

土 地 (単位:円)	
1/1 前期繰越 650	9/23 現 金 350
5/3 現 金1,000	

給 料 (単位:円)	
10/10 現 金 450	

支 払 家 賃 (単位:円)	
11/23 現 金 275	

支 払 利 息 (単位:円)	
12/23 現 金 10	

借 入 金 (単位:円)	
12/23 現 金 900	1/1 前期繰越1,020
	1/15 現 金 700

資 本 金 (単位:円)	
	1/1 前期繰越1,900

商 品 販 売 益 (単位:円)	
	3/20 現 金 800

受 取 利 息 (単位:円)	
	7/20 現 金 5

土 地 売 却 益 (単位:円)	
	9/23 現 金 45

問題 2 - 7 試算表(1)

【解 答】

問1

合計試算表
(単位：円)

借方合計	勘定科目	貸方合計
1,000	現金	400
400	商品	300
800	土地	
250	借入金	700
	資本金	1,000
	商品販売益	200
150	給料	
2,600	合計	2,600

問2

残高試算表
(単位：円)

借方残高	勘定科目	貸方残高
600	現金	
100	商品	
800	土地	
	借入金	450
	資本金	1,000
	商品販売益	200
150	給料	
1,650	合計	1,650

問3

合計残高試算表
(単位：円)

借方残高	借方合計	勘定科目	貸方合計	貸方残高
600	1,000	現金	400	
100	400	商品	300	
800	800	土地		
	250	借入金	700	450
		資本金	1,000	1,000
		商品販売益	200	200
150	150	給料		
1,650	2,600	合計	2,600	1,650

問題 2 - 8 試算表(2)

【解 答】

問 1

合計試算表
(単位：円)

借方合計	勘定科目	貸方合計
5,820	現 金	4,535
1,800	商 品	1,600
550	貸 付 金	500
1,650	土 地	350
900	借 入 金	1,720
	資 本 金	1,900
	商品販売益	800
	受取利息	5
	土地売却益	45
450	給 料	
275	支払家賃	
10	支払利息	
11,455	合 計	11,455

問 2

残高試算表
(単位：円)

借方残高	勘定科目	貸方残高
1,285	現 金	
200	商 品	
50	貸 付 金	
1,300	土 地	
	借 入 金	820
	資 本 金	1,900
	商品販売益	800
	受取利息	5
	土地売却益	45
450	給 料	
275	支払家賃	
10	支払利息	
3,570	合 計	3,570

問 3

合計残高試算表
(単位：円)

借方残高	借方合計	勘定科目	貸方合計	貸方残高
1,285	5,820	現 金	4,535	
200	1,800	商 品	1,600	
50	550	貸 付 金	500	
1,300	1,650	土 地	350	
	900	借 入 金	1,720	820
		資 本 金	1,900	1,900
		商品販売益	800	800
		受取利息	5	5
		土地売却益	45	45
450	450	給 料		
275	275	支払家賃		
10	10	支払利息		
3,570	11,455	合 計	11,455	3,570